夜間学校だより

発行
釜ヶ崎夜間学校
西成区萩ノ茶屋2-8-18
喜望の家気付
電話 六四七ー三九四六
●木曜日 夜7時ー9時

1982年度 第1期 4月～6月 テーマ『ピンハネ』

5月のテーマは『医療でのピンハネ』今夜はその3

市更相は、なぜ我々の権利をうばうのか!!

入院をしなければならなくなったらどうする？

前回は、裏にあるように「病気になったらどうするか？」をみんなで考えました。結局、個人ができることには限界があり、たとえ、保険をもっていても、仕事がなくなり、印紙をはれなくなれば保険も使えなくなってしまう。そこでは、福祉に頼らざるをえなくなる、ということになってしまいます。

しかし、釜ヶ崎の現実をみるとどうでしょうか？

病気で働けず、市更相へ相談に行っても二、三回入退院を繰り返していれば、頭ごなしに、「なぜ、病院をでてきた!!」とどなられ、病気を治す気がない、と決めつけられ、結局、紹介はできない、と放り出されてしまうのが現実です。

実際、誰でも頭ごなしにどなられれば、「福祉の世話になどなるものか!!」といった気持ちになるのも、うなづけます。

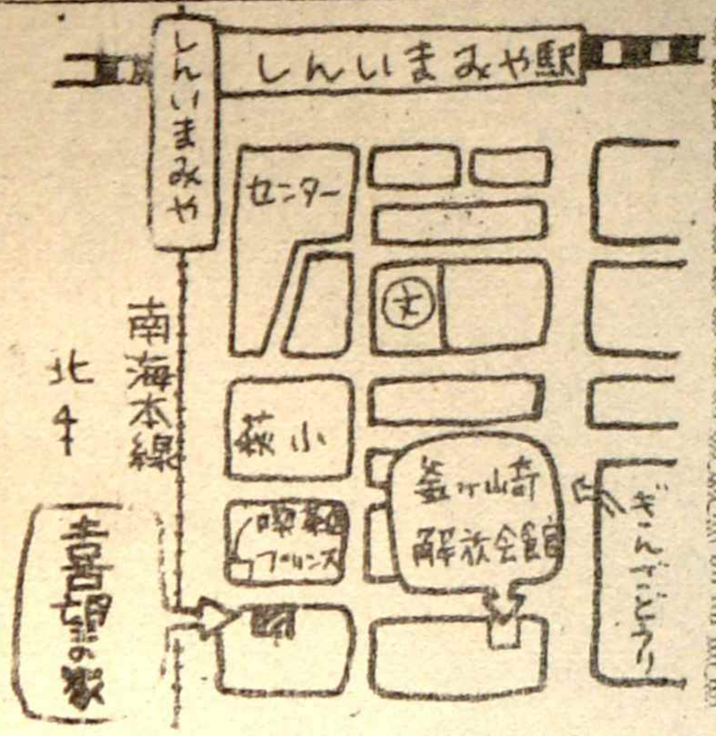
今回は、なぜ市更相は、われわれの生きる権利を認めないのか、そして、自分自身が入院しなければならなくなったらどうするか、を病院との関係をふまえつつ、みんなで考えたいと思っています。

今、即入院したい仲間にとっては、この話し合いは早急の解決にはならないと思いますが、長期的な展望をもちつつ、八方ふさがりの現実に小さな穴をあけていけるよう、知恵を出し合いたいと願っています。

われわれの生きる権利を獲得するため、今、元気な仲間もぜひ、一緒に考えて下さい。

夜間学校文集（2冊めを）つくろう！

小説・詩・俳句・短歌など、なんでも書いて下さい。日雇いの生活を描いた作品を待っています。



〔第一期第六回報告〕
病気になったらどうするか。

Tさん44才……妻と死に別れてから釜へ来た。その後、約12年して結核にかかる。以来2年ほど入院ー退院ー入院のくりかえし。

Aさん39才……釜へ来て7年目に結核にかかる。かっ血ー入院ー自己退院ーかっ血ー行先不明。

Kさん40才……日雇いをして12年目に結核で入院。その後、自己退院ー入院のくりかえし。

日雇いをして10年ぐらいするとあぶなくなる。

ーそろそろわしも気をつけないかんな。10年が釜の厄か。みなさんはどうですか。

◎人間関係を使う。

薬をもらって飲む

故郷へ帰る

先輩・知人を頼る

ー日頃から心がけて、頼れるような人をつくっておくということか。

ーなんぼそんな人があっても、長く病気がつづくようなことがあったらどうなることやら。

ー人に世話になるというのは、気をつかうし、わしはかなわん。

◎保険に加入する。

健康保険

郵便局簡易保険

保険料

ー仕事のないときは、どうしてー印紙をはるんや。

ー仕事のないときは金もあんまりない。金のないときは、ええもんが食えん。生活は苦しなる。そんな時は病気になりやすい。そやけど、仕事に行けないから、印紙ははれない。はれないから、保険は使えん。

「今の保険制度は矛盾してるやないか！」

◎政府の機関を使う。

民生

医療券

医療センター

市更相

救急車

施設

ーお役所にお願いするということか。

「おまえらアンコは、結局ぶっ倒れて助けを求めに来るんだろ。酒飲んでるときは威勢がいいが。」と言ってセンターのやつらがでかい顔をする。

◎役所のやつに大きな顔されてたまるかえ。

ーわしらは、汗を流して働いてるやないか。仕事のないときは、「仕事をさせろ」とまで言うんやで。それに転安のやっがしっかり汗流さんもんやかう。わしらが安定して仕事ができんのや。ピンハネもされなあかん。それで生活が苦しいなって病気にもなるねんやないか。

「わしらには人として医療を受ける権利がある。」

ー夜間学校生のMさんは言う。

「日雇い労働者に主治医がいて何が悪いんだ！

日雇い労働者も病気の時は家でゆっくり療養したい。あたりまえのことやないか。」

なんとかせなあかん。